

# 終戦記念日を迎えて

～幼少時代の記憶を辿りながら～

国病久原会 会長 廣田典祥

たしか5～6歳の頃だったと思います。ある日、東條英機陸軍大臣が大村町（市制がしかれたのは1942年）を訪問されたことがありました。こんなことを知っている市民（私よりも上の高齢の人なら）が何処かに居られる筈です。

私の家は当時が大村町の繁華街（本町一丁目）に商店を営んでいましたので、その中心街を車で通るので、市民は歓呼の声を上げて日の丸の旗で歓迎することになったのです。

東條大臣を載せた公用車が鶴亀橋方面から本町の方にゆっくりしたスピードで町中を静かに走行してきました。その車の形状は忘れもしません。先端が軍艦のように尖っているピカピカの黒の車体で、それまでに見たこともない立派な乗用車でした。

車上の東條大臣は陸軍の帽子を被り、立位で敬礼の姿勢で、首を前後に振りながら、市民に向かって挨拶を繰り返されました。その姿、歓迎する市民の姿勢、通りの雰囲気など、威厳に満ちた光景に、子どもながら、強烈な印象を受けました。その情景は今でもよく記憶しています。

その東條大臣の振る舞いを「トージョーサン、トージョーサン」と言って、自宅に帰ってから、家族とか番頭さん達の前で、右手を頭につけて、首を前後に振る動作で東條大臣のモノ真似を演じたところ、やんやの喝采を受けました。

「ノリボー、ノリボー、トージョーサンをやって見せて」と店の番頭さん達から囃し立てられると、ノリボーという愛称で呼ばれていたボクは有頂天になって東條大臣のモノ真似を繰り返しました。子供心に軍人さんは偉いのだと思うようになっていたのです。元来、内気なボクでしたが、何処か目立ちたがり屋のところがあるのは、こんな幼少期の体験の記憶が残っているためかも知れません。

時の陸軍大臣が大村町を訪れたイベントは何を意味するのか？陸軍の町として活気にあふれるなか、歩兵第46連隊の士気を鼓舞される為だったろうと想像しますが、子供心には、そんなことを考える力はありません。軍都大村にとっては、重大な前触れ、運命を予感させることになろうとは。大人になって振り返ると、この出来事の運命的な、破滅的な将来への道程を、大臣自身が一步一步踏みしめておられたと言えると思います。トージョーサン（東條英機）は終戦後、駐留軍からA級戦争犯罪人として処刑されたことは、年輩の人ならよくご存知かと思います。栄光と絶望のドラマが、一生の間に展開するとは。

その大臣が醸し出す雰囲気は、国民の熱気を一身に浴びるような、劇場効果とでも言うてよいでしょう。今になって感ずるのですが、有名な政治家が、大衆を引き付けて演説する、例えばアドルフ・ヒットラーのように、国民全体を惹き付ける魅力も、同じような陶醉感をもって群衆が洗脳されてゆくのを連想させます。

1941年12月に太平洋戦争が始まり、町の中には、時折、7つボタンの若い軍人（予科練）が遊びに来ていました。話しかけると、気楽に話に乗ってくれます。白い軍服のボタンを触らせて貰いました。「若い血潮の予科練の、7つボタンは鎖に錨」という軍歌が流行っていたので、間近に接することができましたので心が躍りました。その軍人さん達は海軍航空隊大村基地で訓練を受けていたのだと思います。この軍人さんには悲壮感などあるはずがありません。自分も、将来は特攻隊を志願し、お国のために役に立ちたいと、密かに思っていました。もし、ボクが5年早く生まれていたら、同じような運命を辿っていたかも知れません。

零戦（ゼロセン）は開戦当時、非常に有能な戦闘機だったことは、あまりにも有名。だが次第にアメリカの戦闘機に押されるようになってきたので、大村の海軍航空廠では「紫電改」とか「流星」という、性能が更に向上した機体が作られていることは、巷の噂を聞いていました。戦争は兵器の技術革新の戦いとも言えます。その紫電改が時々低空で大村の空を飛翔するのを見て、年長の子が「あれはシデンカイだあー」と言っていました。

大村海軍航空廠は東洋一の規模を誇る軍需工場だったのです。その工場を動かした技術者は東大をはじめ当時の帝国大学出身者で、日本を代表する頭脳集団であったそうです。特に、航空廠でのタクトシステムを航空機生産活動にとりいれた人達は、戦後の経済大国を生み出した各企業でも卓越した力を発揮されたとのこと（放虎原は語る、大村大空襲と第二十一海軍航空廠、大村市出版 平成11年3月）。

此処、大村の地に、日本の戦闘能力を維持する壮大な軍需工場があったとは、殆どのひとは知る由もないでしょう。

太平洋戦争の開戦時（小生、小学校1年生）から終戦時（小学校5年生）は物心ついた年頃でしたので、しかも新聞には戦争の記事が毎日のように報道されていたので、それを貪るように読んでいました。当時は、我が家には新聞しかなく、ラジオはなかったので、それで小学生だったボクは新聞の活字を低学年生のときからかなり読み込んでいたように思います。

新聞では戦争報道がいつもトップの紙面を占め、戦果を「大本営発表」の形で記載されているので、常に「勝った、勝った、また勝った」と思っていました。真珠湾攻撃から始まり、マレー沖海戦、シンガポール占領など、次々と勝ち戦が続き、特に、シンガポール占領を遂げた時、全国的に提灯行列で祝賀行事が行われました。そして、東條英機総理大臣の計らいで日本の国民学校生徒全員にゴムボール1個が配給されました。当時ゴム製品は全て軍用に使用されていた時代なので、子ども達にはゴム製品が殆ど手に入らなくなっていたので、文房具店から、子ども一人に一個ずつ無償で貰えたことが非常に嬉しかった。

真珠湾攻撃は映画館のニュース映画でも報道されました。特に、シンガポール沖のマレー海戦では、英国海軍の主力戦艦、プリンスオブウェールズ、レパルスの2隻の戦艦が日本海軍の飛行機の攻撃で、海面を巡回しながら沈没してゆく映像で、日本軍の航空機による作戦で見事に成果を上げる様子を、心を踊らせながら、見た記憶が残っています。戦争映画を観る度に、沸き立つような高揚感、優越感を感じました。日本は強い国だ、不滅の国だ、精神力で勝る国だ、元寇が押し寄せてきたときも神風が吹いてきて、神の国日本を守ってくれたのだ、資源は乏しいが、南方方面で石油やゴムを手に入れることができたので、戦に負ける筈がないと思っていました。

小学校時代(実は国民学校と称していました)、長ずるにつれ、日露戦争の知識も増え「皇国の興廢、この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」と東郷元帥が、バルチック・ロシヤ艦隊を対馬沖にて迎え撃つに際して、艦旗にZ旗を掲げた話は余りにも有名な事実で、小学校時代の軍国少年だった小生にとっては、胸を驚かせるような訓示だったことを思い出します。あの大国ロシヤに対して、当時のアジア諸国の中でいち早く西洋文化を取り入れ、急速に新興国になった日本は、ロシヤ艦隊から日本海軍は叩きのめされるだろう、という大方の見方がロシヤ皇帝をはじめ、世界各国はそういう予想だったと言うことです。

乃木大将とステッセル将軍との停戦会談の様子、「庭にひとと、なつめの木。敵の将軍ステッセル」とか。今のようにテレビやスマホなどのような即時の映像は無かったが、軍歌で戦記が語られるので、その情景が一層、想像力を膨らみます。その実、多数の戦死者をだしながら、ようやく勝ち得た戦いだったことが、あとで知りました。

要するに、日清戦争では「キグチコヘイハ、シンデモ、ラッパヲ、クチカラハナシマセン デシタ」と勇敢な壮絶な兵士の話を聞いたものです。戦場で壮烈な戦死が美化され、日清・日露戦争の悲惨な戦いも、日本は何とか勝利の側についたのです。戦争の悲惨さは隠蔽され、美化された物語として子供心に聞いたのです。

子供の頃、確実にボクも軍国少年だったと言えます。殆どの国民は戦意昂揚のもとに陶醉していたのかも知れません。

このボクは毎日のように新聞を漁るように読みましたので、開戦当初の日本軍の勢いが次第に悲壮感をもって語られるように変わってきました。アッツ島の玉砕、ガタルカナルの海戦、山本五十六元帥の戦死など、「勝った、勝った」の勝ちいくさではなくなり、大本営発表も華々しさが影をひそめ、それを不思議に思っていました。ここで東條内閣が倒れたとの報道も読みました。それが何を意味するのか、分かりませんでした。その後「本土決戦一億総玉砕」「鬼畜米英」「欲しがりません、勝つまでは」という決死の覚悟を求める標語が出るようになりました。いまでは信じられない狂気じみた言葉ですね。

新聞でも特に、インドでのインパール作戦が苦戦している様子がわかり、隣のお菓子屋さんの家でも戦没者が出たとか、聞きましたので、いつしか、人々の苦悩は隠されていたように思います。大村市はもともと明治の頃から第46連隊という陸軍部隊があり、日露戦争、上海事変、日中戦争、大東亜戦争、ビルマ進撃、インパール作戦に多くの兵士を送り届けま

した。戦場が拡大するに従い、補給路が伸びに伸びて戦力を衰退させていったように思います。

何処の家でも出征、出征の一片の赤紙で健康な青壮年男子なら招集令状を受け取るようになっていったのです。

その後の話ですが、この赤紙配りを役所の仕事で担当していた方の貴重なお話を聞くことが出来ました。この方は大村市民にとって、「赤紙配りの役所の人」と、よく知られていたとのこと。「私とその家の玄関先に訪れると、そのお家の人は、サッと顔色を変えられました」との話。「万歳、万歳と表面では言っていましたが、心の内では、言いしれない悲痛な思いを持っておられました」と。庶民の本音はそうだったのでしょうか。

1944年10月25日、米軍のB29爆撃機が飛来し、空襲を受け、第21海軍航空廠は壊滅的な損害を受けました。私が住んでいる所は商店街でしたので、幸い工場から離れ、爆弾の直撃を受けることはありませんでしたが、ノリー坊の僕は、好奇心に駆られ、自宅の屋根の上にある洗濯干場のベランダにのぼり、B29爆撃機が空高く、銀箔の機体をキラキラさせながら編隊飛行をするのを眺めておりました。周辺の山から日本軍の高射砲が一斉に火を吹き、砲撃しますが、どの弾丸も高度1万メートルを飛行する敵機B29には届かないのです。その下で炸裂するのです。「何で日本の高射砲の威力が足りないだろう？」と思いつつ、子供心に歯がゆい思いをして眺めておりました。そこへ「ノリー坊一、危ない！！、そこを早く降りて来なさい！！」と母親が絶叫しました。危険だと思っていない僕でしたが、渋々母の言う通りにしました。母親がことの重大さ、危険が迫っていることを察知して、子供を守る本能の叫びだったのです。

その日、一日にして、あの壮大な第21海軍航空廠は壊滅的な爆撃を受けてしまいました。爆死した殉職者272名、重軽症者300名余。子供のボクはそんなことがあったとは知りませんでした。報道でもその詳細が分かりませんでした。B29を撃墜したとか、そういう記事が強調されていたようです。

その後は次第にグラマン戦闘機は大村市上空を我が物顔のように、時にはウンカが沸くように飛来して来ました。ある時空襲警報になると同時に、あつと言う間に頭上に低空飛行で飛んできました。このボクはその飛行機の搭乗員と目が合ったような気がします。恐怖感という感情というよりは、敵機に同じ人間が載っている、初めて外国人を見たぞ、という感じだったことを覚えています。いまで言えば傍観者だったのです。

このように大村市は隅から隅まで、グラマン戦闘機に蹂躪されていたのです。その頃、機体生産を必死で維持しようとして、俄づくりの軍需工場が周辺の山間部等に分散して作られ、旧制中学校、女学校、高等科の生徒が学徒動員という若さで航空機生産に従事させられていました。沖縄上陸作戦前に特攻機生産をとことん叩くという米軍の戦略があったようで、低空飛行の戦闘機から爆撃、機銃掃射の攻撃を受け、若い命が失われたとのこと。3歳上の旧制中学生だった私の兄もベニヤ板の機体生産に従事していましたが幸い犠牲にはなりませんでした。

しばらくして、あの沖縄本島の激戦のニュースで、一日一日と次第に我軍が後退してゆく戦況の記事を読みました。想像を絶する悲劇が続いたことは、紙面では全く分かりませんでした。

ボクが、大村市の疎開先の家にいた時のことです。昭和20年8月9日、午前11時過ぎ、昼間の暗い家の中で遊んでいました。何の前触れもなく、マグネシウム焚いたような閃光（ピカーッ！！）で眼前が真っ白になり、目が眩んでしまいました。その1分ぐらい後でしたか、猛烈な地鳴りを伴った爆音（・・・・ドーン！！）が襲ってきました。戦時下、焼夷弾の被害を最小にするために、家の天井板は全て外されていましたので、バラバラバラと大量のゴミが頭上から落ちてきました。「ノリ坊一、危ない！！早く伏せて！！」と母の恐怖に満ちた絶叫が飛んできました。慌てて、床下の空間に潜り込んだことを覚えています。この時、大村から直線距離で20キロ程離れた長崎市の浦上では新型爆弾（原爆）が投下され、一瞬にして7万人以上の人が亡くなったことをあとで知りました。

その夜、大村湾の半島の山並みの向こうに位置する長崎方面の、いつもは暗い筈の夜空が真っ赤に燃え、海面がいつまでも赤々と燃えるような色が広がっていたことを鮮明に憶えています。

翌日、町の防空壕にいましたら、長崎方面から避難してきた人に出会いました。顔面に水泡があったようです。「ヒロシマに落ちた新型爆弾と同じだそうだとボソボソと語っていました。

当時の海軍大村病院（長崎医療センターの前身）へ多くの負傷者が運びこまれたのです。このときの様子は、大村海軍病院長 故 泰山弘道：長崎原爆の思い出（国立大村病院国立移管25年記念誌）に詳しく紹介されています。泰山院長をして、「海軍軍人としては、というよりも当時の日本人の識者の中においても類稀な広い視野と物の本質を見抜く能力を備えていられた」と編集子（木下吉雄）が述べています。私もそう思います。

私は、原爆の悲惨さを私は語るような体験はありません。しかし原爆被災者の語りや聞くこと、知ること、それを次世代に話してあげることが出来ます。

昭和20年8月15日、疎開先の家から、本町の実家に帰りました。天皇から終戦を告げるお言葉が放送されました。その日の午後遅く、大村航空隊から飛び立った飛行練習機である赤トンボが空を舞い、「我々ハ最後ノ一兵マデ戦イ抜ク覚悟ダ」という大きな拡声器で市民に呼びかけていましたので、敗戦だとは子供心には信じられませんでした。

戦後77年経ちました。今や戦争を語ることで出来る人も少なくなったと思います。私は少年時代に戦争を迎え、直接戦争の被害を受けた経験はありませんが、間接的に新聞とか、大人の話とか、多少は爆撃の被害状況を見てきました。そして小学校5年の時に終戦を迎えました。疎開児童の経験もありました。

これからも、人類は何故戦争を起こすのかという難問をいささかでも解いてみよう、考えてみようと思います。これまで、小さな戦争が次第に戦争を拡大してゆく歴史がありました。小さな衝突でも、恐ろしい結末に発展するのだと思います。ひょっとすれば核戦争という人

類の破滅する危険が迫っているのかも知れません。対話、対話を重ね、外交、外交を重ね、平和の道を希求し続けて行くべきだと思っております。国際協調の精神を守ることが大切だと考えます。

これまで多くの戦争によって命を落とされた方々へ、ここからのご冥福をお祈りいたします。戦争の惨禍を二度と繰り返さないことを誓います。それが私達、平和の中で暮らしてゆく者の責任だと思えます。